



A nameless hero

名無しの英雄

I

笑うヤカン

【イラスト】馬克杯

試し読み版

目次

Contents

偉業 1 Exploit 1	ラーケルの黒魔術師成敗 Larkel's black mage defeated	006
偉業 2 Exploit 2	貧困の村ラザダの救済 Relief of poverty village Lasada	013
偉業 3 Exploit 3	奴隷解放 Liberation of slaves	024
偉業 4 Exploit 4	アンティカ王国動乱解決 Troubleshooting of Antica kingdom	042
偉業 5 Exploit 5	ロディーク山の火竜退治 Extermination of Mt. Rodik's fire dragon	075
偉業 6 Exploit 6	テレーズ湖の水霊救出 Rescuing the water spirit of Lake Therese	099
知られざる偉業 Unknown exploit	生涯最大の戦い Lifetime's biggest fight	146
偉業 7 Exploit 7	盗賊団『ライカニッツの亡霊』成敗 Thieves team "Ghost of Leicanitz" Overturned	178
偉業 8 Exploit 8	霊泉アムリタの探求 Quest for Amonita Brumi	213
知られざる偉業 Unknown exploit	単騎五万人切り 50,000 ladies-kill	261
挿話 Episode	古き契約 Antient contract	289



BEGINNING NOVELS



A nameless hero

名無しの英雄

笑うヤカン

【イラスト】馬克杯

I

偉業1 ラーケルの黒魔術師成敗

向かい合うのは二人の男。

一人は、まだ歳若い青年。十七、八かそこらだろう。整った容姿に太陽を切り取ったかのような金の髪、銀色に輝く鎧に身を包み、抜き放った剣は暗い地下の部屋だというのにまばゆい光を放っている。

対するは歳を取った老魔術師。黒いローブに身を包み、フードの奥で邪惡な瞳をギラギラと輝かせ、手には赤く曲がりくねった短刀が握られている。

「フィーナを返してもらおう！」

青年が、怒鳴る。

「どこまで儂の邪魔をすれば気が済むのだ、この忌々しい小童めが。我が前から消えうせるがいい！」

老魔術師の指から、電撃が迸る。ほとばし人間一人など一瞬で消し炭に変えるその稲妻は、青年の持った剣に散らされ虚空に溶けた。

お返しとばかりに青年は地を駆け、風のように剣を振るう。小枝のように筋張った老いた魔術師の腕を一刀のもとに切り捨てるはずのその一撃は、柔らかなローブの表面で金属に弾かれるように

止まった。

青年と、老魔術師と。若者と老人、剣士と魔術師、正義と邪悪。全てが正反対の二人は、同時に舌打ちした。

「やはり勝負はつかぬか。だが小僧、今宵こそは貴様の負けだ。既に準備は整っておるのだ」

「なんだと!? まさか……!」

老魔術師はビロードのカーテンで覆われたベッドのもとに駆け寄ると、短刀を掲げて叫ぶ。

「我が悲願、邪神の復活はこの処女の血をもつて成される!」

「待てッ! そんなことの為にフィーナを殺されてたまるか!」

青年が駆けるが、間に合う距離じゃない。

「さあ、今こそ我が前に現れ出でよ、邪神オウ——」

カーテンを開き、老魔術師は短剣を振り下ろそうとし……その動きをピタリと止める。

青年もまた、全力で駆けていたその身体を、まるで時が止まったかのように……

って駄目だ。気を逸らす為に実況の真似事なんかしてみたが、とてもじゃないが我慢できない。

「おおおっ、出すぞっ!」

どくどくと、聞こえるはずのない音が感じられるほどの勢いで、俺はフィーナの中にたっぷりと射精した。

「はぁん……」

フイーナは目を細め、気持ちよさそうにそれを受け入れる。

ついさつきまで処女だったのに、凄いエロさだ。ちよっぴり早漏気味に俺が出しちゃったのも仕方ない。

『何をやってる!!』

男二人の声が綺麗に揃った。めんどくせえな。二人揃って童貞か、こいつら？

「何って見ればわかるだろ、ナニだよ」

俺がそう答えると、二人は同時に襲い掛かってきた。

ベッドのマットに稲妻が突き刺さり、カーテンを支えてた柱が真つ二つに切り裂かれる。

「おいおい、あぶねえな。この子まで殺す気かよ？」

俺はフイーナを抱きかえながら、とつくにベッドから離れていた。

魔術師的には処女を失った時点で価値がないから、俺もろとも殺す気満々なんだろう。

「よくもフイーナをつ！」

「よくも我が計画をつ！」

またも同時に攻撃してくる。仲がいいを通り越して、ホモなんじゃないかと疑うような連携ぶりだ。まあ、フイーナみたいないい女を捕まえておいて、何も手を出さないなんてホモじゃなくても不能なんだろうな、あの爺さん。可哀想に。

俺は青年の剣を無造作に手で押して爺さんの稲妻にぶつけて散らし、そのまま横をすり抜け腰の



剣を抜いて滑らせる。

おっと、剣っていつでも脚の間の名剣じゃないぜ、そっちは美女専用だ。

俺が振るった剣は、さっき若者の剣を弾いたロープを易々と切り裂き、爺さんの身体ごと真つ二つに両断した。

無数につけた護符で身を守っちゃいたが、護符自体は守れないのが魔術つてもんだ。

護符ごと切っちゃえば、ただの薄着の爺さんに過ぎない。

ま、フェイクの護符もたくさんあったから、見切るのはちょいとばかり難しいが俺にとっちゃなんでもない。

「な……」

男は信じられないものを見た、みたいな表情で俺を凝視した。

「おい、見るんじゃないやねえよ、男に見つめられても気持ちわりい。それよりこの子はお前の恋人か？」
腰砕けになってるフィーナに手を貸すと、男はぶんぶんと首を縦に振った。

ちっ、妹とかだったらもう二、三発楽しんだトコなんだが。

恋人や夫のいる女にはなるべく手を出さないのが俺のポリシーだ。

「じゃあ、後はしっかり守れよ」

フィーナの背をぽんと押し男に任せると、俺は背を向けた。

美女もないならこんな辛気臭いとこに長居する理由はない。

「あの……あなたのお名前は？」

フィーナが俺の背に声を投げかける。

そんなもん、俺だって知らない。だから、いつも通り俺はこう答えた。

「さあな」

「……サーナ様……」

ぼんやりと呟くフィーナを置いて、俺はその場を後にした。

登場人物紹介

CHARACTERS

アルビーク

英雄の星のもとに生まれた青年。伝説のエメラルドの防具と、魔を弾く聖剣ラスナーを携え、幼馴染にして恋人のフィーナを救う為、邪悪なる魔術師ウエルドネを討たんとラーケルの大迷宮を単身で踏破した。

ウエルドネ

邪悪なる魔術師。アルビークとは何度も敵対し、その度に勝負はつかず引き分けに終わる。古の邪神復活を企んでおり、数十年に及ぶ入念な準備の末、清らかな乙女の魂を捧げれば邪神が復活するところまでこぎつける。

古の邪神

太古の昔、地下から世界を支配したという大いなる神。無限の力を持ち、多くの処女をはべらせていたという。一説によれば人間の魔術師であつたとも言われているが、定かではない。

フィーナ

アルビークの幼馴染にして恋人。心身共に清らかな乙女で、神々ですらため息をつくほどの美しさを持つ。アルビークとは清い交際を続けており、キスはおろか抱擁さえしたことはなかったが、内心それを不満に思っていた。

サーナ

魔術師に美女が攫われたとの噂を聞き、迷宮に忍び込むとフィーナを口説いてセックスに持ち込み、八発ほど彼女の中に精を注ぎ込んだ。十月十日後、生まれた赤ん坊にアルビークが頭を抱えることになるが、彼にはあまり関係のない話である。

偉業2 貧困の村ラザダの救済

1

フィーナと別れてクソみたいな老魔術師の住処を出た後、俺は近くの村をブラブラと歩いていた。これからつてところで邪魔が入ったせいで、どうにも欲求不満だ。

どっかにいい女がいねえかな……

と、キョロキョロ見て回っていると、開けっ放しになってる建物の中が目に入った。立てである看板を見るに、どうやらここは雑貨屋らしい。

「いらつしやい」

店の中に足を踏み入れると、干した葉草だのロープだのの独特な匂いが鼻をつく。

俺に微笑みかけてくれた店員は、しみつたれた田舎の村にしちゃなかなかの美女だった。

栗色の髪を長く伸ばした、美人というより可愛い、という感じの女。歳は二十一、三ってトコか？ 顔のつくりは素朴だが、なにより胸がデカイ。厚い革のエプロンで隠されてはいるが、あれはかなりの大きさだ。

どんな服を着ていようが、ほぼ正確にスタイルを当てられるのが俺のちよいとした自慢だ。

「何をお求め？」

「君かな」

俺がそう言うのと、店員はクスクスと笑った。真面目な顔で、しかし真面目すぎない感じで言うのがウケるポイントだ。

「あたしですか。高いですよ？」

「へえ、このロープより？」

俺はぐるぐると巻いてあるロープを示して言った。十メートルにつき銅貨十枚。安くも高くもない値段だ。

「何と比べてるんですか何と。金貨十枚は欲しいところですね」

笑いながら言う。なかなかノリがいいようだ。

都市部の最高級娼婦だって、金貨一枚もあれば釣りがくる。十枚もあればこのくらいの村なら数年は遊んで暮らせるだろう。まあ、すぐに冗談だとわかる値段だ。

「十枚とはなかなか吹っかけるなあ」

「安い女と思われちゃありませんから」

あはは、と俺達は笑い合う。笑いながら俺は小袋に手を伸ばし、金貨を十枚取り出すとカウンターのの上にトンと置いた。

「はい、十枚」

「……え？」

店員は目を丸くして金に輝く硬貨を見つけた。金貨ってのはそれなりに価値が高い。

こんな村じゃ滅多に見ることもないだろうな。

彼女が呆けている間に俺はカウンターの中に入ると、後ろからエプロンの中に手を差し込んで両胸を思いつきり揉みしだいた。

「ちよっ……!!」

「金貨十枚払ったろ？ そつちが提示して、こつちは払った。契約成立ってわけだ」

「そ、そんな……」

身体を嫌がるようにくねらせながらも、店員は俺を突き放すことができない。金貨十枚はそういう額だ。

その証拠に、彼女の視線は未だにカウンターの上の金貨に注がれてた。

「これ、贋金じゃ……ないでしょうね？」

「そう思うんなら確認してみな」

むにむにと胸を揉みながら俺は促す。この胸がまた、ふわっふわのむにっむにで、なんとも揉み心地がよい。

それでいて、指を押し返す弾力と、手のひらに収まりきらないこの大きさ！ たまんねえなあ。

店員は金貨を手を取ったり、ちよっと爪で傷をついたり、天秤で重さを量ったりした。

勿論 もちろん その間も俺の手はずつと胸を揉み続けている。

「本物みたい……」

「確認は済んだか？　じゃあ、いいだろ」

「ちよつと待つて……」

服を脱がそうとする俺の手を握り、止める。しかし完全な拒否じゃない。

彼女の目は金と貞操を天秤にかけて、迷つてゐる目だ。

娼婦だったら金貨十枚も積めば喜んで何回でもさせてくれるだろうが、この額で迷うということはそれなりの貞操観念を持つてゐるんだろう。こっちとしてもその方が嬉しい。

「ええと、ここでするの？　……最後まで？　あたしの一生を買うとかそういう話ではないよね？」

「そりやそうだ。せいぜい、明日の朝まで……つてトコかな。場所はベッドでもいいが、一発目はここですさせてくれよ」

店員はしばらく悩んでいたが、やがてゆつくりとカウンターの上の金貨を取ると、エプロンのポケットにしまった。

「取引成立だな。なあ、名前教えてくれよ」

「……アンジェ」

アンジェは羞恥半分、嫌悪半分といった表情で答える。いい顔だ。こういう表情をしている女を、快楽でドロドロに溶かすのがいいんだよな。

「天使^{アンジェ}か。いい名前だな、似合ってる」

「お世辞はいいわ。恥ずかしい名前よ」

そう言いつつも、アンジェの表情に少し羞恥が勝ち始める。俺はエプロンの紐をほどき、上着を脱がせると下着の上から彼女の胸を揉みながら首筋に舌を這^はわせた。

「そんなことないさ。可愛らしい名前だ。それに、名前通り俺を天国に連れていつてくれるんだろ？」

「んん……馬鹿」

アンジェが艶かしい息を吐く。俺は彼女のブラを外すと、向きを変えさせてその双丘にむしゃぶりついた。

2

「ああ……間違いない、ここが天国だ」

ぐにぐにと豊かなおっぱいを両手で鷲掴みにしながら、その間に顔を挟む。

舌を伸ばすと、ほんのりと汗のしょっぱさが味わえた。

「ああん……」

乳首を口に含んで転がすと、アンジェは色っぽい声で喘いだ。

舌や指の動きには、ちよつとした自信がある。右手で胸を揉みほぐしつつ、舌で乳首を愛撫し、

左手でスカートをたくし上げてアンジェの股間に這わせる。

下着に守られたそこは、既にしつとりと湿り気を帯びていた。

「カウンターに手について」

俺は再びアンジェの後ろに回る。あのおっぱいを顔から離すのは惜しいが、なに、またすぐに再会できるさ。

言われるままにカウンターに手について尻を突き出すアンジェのスカートを捲り上げると、俺はズボンを下ろして自らの物を取り出した。

「おっき……」

それを視界の端に捉え、アンジェは嬉しいことを言ってくれる。

言うまでもないことだが、指や舌以上に自信があるのがこの一物だ。インパクトはあるが女を怯えさせない程度の大きさに、太さと硬さ、それとによりスタミナがある。

俺はアンジェのショーツを横にずらすと、後ろから思いつきり突き入れた。

「あぁっ、すご、おっき、い……」

両手で胸を持ち上げるように揉みながら、ずぶずぶと突き進んでいく。

「あぁっ、広げられてく……」

アンジェは尻を突き出しながら、はあはあと荒く息をする。アンジェの中が精をねだるようにぎゅうぎゅうと俺の物をきつく締め付ける。

「いくぞ、アンジェ。天国に連れてってやる」

ゆつくりと引き抜き、またゆつくりと奥まで突き入れる。それを繰り返しているうちに、アンジェの股間はその潤いをどんどん増し、声も甘くなっていく。

「あぁん……すごおい、あ、あぁ……気持ちいい……ん、あはぁ……ん」

愛液が俺の物を伝い、ぽたぽたと地面に垂れる。もはやアンジェは腕で身体を支えきれず、上半身を完全にカウンターの上に乗せるようにして立っている。

「びっしより濡れてきたな」

「やあ、言わないでえ……」

大分こなれてきているので、俺は腰の動きを加速させていく。パンパンと肉のぶつかる音が店の中に響き、アンジェの甘い鳴き声を味わう。

「いくぞ……っ」

俺はアンジェの奥で精を放った。

「あっ、あぁ……」

ふるふると身体を震わせ、アンジェは精を受け入れる。

硬さを失わないままの剛直を抜き出すと、アンジェの股間から白い液体がごぼりと吹き出した。これは勿論自慢だが、俺のは何回出そうと萎えたりしない。何度でも楽しむことが可能だった。ぐったりとしているアンジェを抱きかかえ、店の奥の階段を上がる。

一階が店で、二階が居住スペースになっているらしい。店のカウンターをするのもいいが、アンジェの体力を考えるならベッドの上でじつくり可愛がった方がいい。なにせ夜は長いんだからな。階段を上がってすぐの扉を開けようとすると、アンジェの手が俺の腕を掴んだ。

「そこ、違う……父さんの部屋だから、そっち……廊下の奥が、あたしの部屋」

「なんだ、親父さんがいるのか？」

てつきり一人暮らしかと思つた。傍に親がいるなら、わざと声を上げさせて『隣の親に聞こえるぞ』と囁いてやるプレイもいいな。

「病気でずっと寝てるの」

体力が戻ってきたのか、アンジェは俺の腕から離れ、自分の足で立つ。

「さっき貰った金貨のおかげで、隣町の薬が買える。……ありがと」

親思いの優しい娘だ。その孝行心のおかげで抱けたわけだから、俺はちよつとサービスしてやることにした。

「やめろよ勿体ない。その金は、美味しいもん食ったり綺麗な服を買ったりするのに使えよ」

そう言つて、俺は扉を開けてアンジェの父親の部屋に足を踏み入れる。

「ちよつと！ 何する気!？」

何を勘違いしたのか、アンジェが俺の腕を引いて止めようとする。未だにチンコ丸出しだからか？

「馬鹿、俺は女にしか興味ねえよ！ ほら、病氣くらい俺が治してやる」

俺はアンジェの親父に手をかざした。病気のせいかな、ヨボヨボの爺さんみたいな面だった。真っ白で紙みたいだった顔色に徐々に赤みが差し、苦しそうだっただけの呼吸が安らかなものになる。

しかめていた表情が和らぐと、なんとか歳相応の顔に見えるようになった。四、五十つてトコか。まあ、野郎の年齢なんざどうでもいい。

「これであとは栄養のある美味いもんでも食わせて二、三日休ませてやれば、すぐに元通り元気になる」

「嘘……何したの？」

「アンジェとセックス」

にと笑って俺はそう言っただけだ。

「もう……」

アンジェが俺の腕の中に身体を投げ出す。むっちりした肉感が腕に心地よい。

「じゃあ、約束通り明日の朝までして……ここでじゃなくて、ちゃんとあたしの部屋で、ね？」
勿論、俺は喜んでそのお願いを聞いてやった。

「ねえ……」

明くる朝。たつぷりとその胎内に俺の精を蓄えたアンジェは、裸のまま俺に甘えるように擦り寄った。

「本当に、金貨十枚も貰っちゃっていいの？ 父さんの病氣は治してもらえたし、あたしにそんな価値なんて……」

「いいんだよ。凄くよかったぜ？」

耳元で囁いてやると、アンジエは耳まで真っ赤にした。可愛い奴だ。

あの後、父親を治してやった俺に恩義でも感じたのか、アンジエはベッドの上で乱れに乱れ、何度も俺の精を中に欲しがった。

「……本当のこと言うよね、凄く助かるんだ、あのお金……この村は貧乏で、もう畑を耕す鋤くわも新しく買うことなんかできやしない。若い人はどんどん街に移っていつちゃうし、残ってるのは老人ばかり。でも、あれだけのお金があれば、なんとかやり直せるかもしれない。ありがとね」

アンジエは俺の唇にちゅつと口付ける。その仕草が可愛くて、俺の愚息はもう一度硬直した。

「そういうことなら、若い人間を増やしてやるよ」

うへへ、と下品に笑いながらアンジエに覆いかぶさる。

「やあん」

口では嫌がりつつも、アンジエは嬉しそうに笑いながら俺を受け入れた。

サーナ

田舎の村と思っていたら思っていたより上玉がいて大満足。

アンジェの父

元は腕のよい鍛冶職人であったが、妻を失って以来の不摂生が原因で病に倒れる。不治ではないが、治療に大金が必要な病に冒されており、一人娘の為に自殺を考え始めていた。

アンジェ

父が倒れてから、看病を続けながら細々と雑貨屋を続けていたが、殆ど儲からず身売りを考え始めていた。後に三つ子を産み、金貨十枚を資金として病気が完治した父や子と共に村を盛り上げていく。

偉業3 奴隸解放

1

「おい、あいつ何やってんだ!？」

「ほら、あれが例の……」

「サーナっていう……」

「女と見れば誰でもお構いなしのド変態……」

町人達が俺を遠巻きにしながらヒソヒソと言葉を交わす。全部聞こえてんだよ馬鹿野郎。

幾ら俺だって、女なら誰でもいいわけじゃない。不細工はお断りだし、九歳以下とか四十歳以上とかもあんまり食指は動かない。いや、上は美人なら五十くらいまではいけるかな？ まあ、誰でもいいってわけじゃない。

今俺の腰の上で揺れてる少女だって、見たトコ十二、三つてところだが目の覚めるような美少女だ。

まだ幼いだけあって胸や尻はあまり出てないが、腰のところがきゅっとくびれ、全身が柔らかい。あまりに可愛らしいから、道ですれ違った時に思わずその場で押し倒しちまったくらいだ。



ベッドじゃないのは可哀想だが、まあ道は誰のもんでもないから他人に文句を言われる筋合いもない。

処女だったせいかな少女も最初は嫌がったが、今は俺の上で気持ちよさそうに腰を振っている。これは自慢の一つなんだが、俺は今までセックスした相手を満足させなかったことは一度もないんだ。

「おい、きさ……」

やたらガタイのいい男が後ろから俺の肩を触ろうとしてきたので、俺はそのまま腕を振るった。

男は数メートル吹っ飛んで民家の壁に激突し、動かなくなる。

まったく、人がいい気分でやってる時に、野暮な野郎だ。

「こ、殺したの……?」

俺の上の少女が、瞳を恐怖に染めながら尋ねた。思わずぎゅっと抱きしめたくなくなるような可愛さだったから、俺は思わず彼女をぎゅっと抱きしめながら優しく囁いた。

「いや、死んじやない。ちょっぴり寝てるだけさ」

「あいつ、奴隷商の用心棒よ。仲間達がたくさん捕まってるの。お願い、助けて」

仲間?

よく見ると、少女の首には奴隷の立場を示す首輪がはまっていた。それに、ボブカットにした緑色の髪からは、ぴよこんと長い耳が可愛らしく飛び出している。

この子、エルフか。エルフってのは亜人の一種で、魔力は人間より強いんだが、腕力がないし寿

命が長い分、文明の発展つてのに乏しい。人間の魔術封じの技術ができてからは、捕らえられて奴隷にされることも多くなっていた。

あんまり酷いもんで、亜人種を奴隷にするのは禁止されてたはずだ。

「いいぜ、助けてやる」

俺は少女の尻を掴むと、そのまま持ち上げて自分も立った。いわゆる駄弁スタイルって奴だ。

「だからお前はそこでそのまま腰振ってろよ」

少女は恥ずかしそうに、こくりと頷いた。

「邪魔するぜ」

ニーナと名乗ったエルフの少女を連れ、俺は趣味の悪い豪邸の扉を蹴破った。

流石にもう彼女は俺の横を歩いている。別に戦いに問題があるわけじゃないが、あのままじゃまるでニーナを楯にするみたいで気分が悪いからだ。

「貴様、ここをキンナリー様の館とこころえべっ！」

早速飛んできた柄の悪い男を殴り飛ばし、踏みつける。

「で、ニーナ。仲間はどこにいるんだ？」

「多分、奥のあの部屋だと思う」

ニーナが俺の足に抱きつきながら、ホールの上の部屋を指差す。

「んじゃあ行くか」

「うん」

俺は逃げられないようにしつかりと扉に鍵をかけると、奥の部屋を目指し歩いた。

「貴様、速やかにぶべっ！」

「よくもがへっ！」

「この娘のごぼっ！」

途中、虫のように湧いてくる護衛の男どもを薙ぎ倒しながら、ずんずんと俺は進む。最後の一人はニーナを人質にとろうとしやがったから、ちよつと強くやりすぎたかもしれん。ま、死んでても別にいいか。

「怖い思いさせてごめんな」

俺がそう言うのと、ニーナは健気に首を横に振った。

「大丈夫。ナイフで刺されるより、サーナの方が早いもん」

完全に俺を信頼している、とばかりの笑顔に、俺は思わず押し倒したくなるが鉄の理性でそれを我慢した。

早く仲間に会わせてやらなきゃな。

奥の部屋の扉を開けると、そこには素敵な光景と地獄のような光景が同居していた。

奥の牢獄に閉じ込められてるのは、間違いないくニーナの仲間達だ。

十人くらいいるが、どれもこれも一級品の美女や美少女。

そしてその手前にいるのは、目を覆わんばかりに醜いでっぷりと太った男と、全身毛むくじらの暑苦しい二メートルくらいの大男だった。デブがキンナリーとかいう奴隷商で、大男は用心棒なんだろう。

「ここまで来るとはなかなかやりますね。ですが、それもここまで。やっておしまいなさい、ゴーガンさん」

デブがやけに甲高い声で指示すると、ゴーガンと呼ばれた大男が巨大なハンマーを手に前に進み出る。

「アンタのことは聞いてるぜ、サーナさんよ。変態だが強いんだってな」

ゴーガンがニヤニヤしながら話しかけてくる。

「ニーナ、離れてろ」

ニーナは少し不安そうな顔をしながら、俺から離れて部屋の間の方に移動した。

「流石に娘を庇いながら俺を相手には……」

「お前、息、臭いんだよ」

ゴーガンの台詞を遮って俺は言った。女の子はあんなにフローラルな香りなのに、なんで男って奴はこんなに臭いんだろうな。

ゴーガンは髭でもじやもじやの顔を真っ赤に紅潮させて襲い掛かってきた。

どうせ顔を赤くするなら、色白の美女にしてみらいたいもんだ。

俺はハンマーを片手で止めると、もう片方の手のひらをゴーガンに叩き込んだ。巨体が吹き飛び、キンナリーを巻き込んでゴロゴロと地面を転がる。

「凄い、凄い！」

その光景を見て、ニーナは嬉しそうにびよんびよんと飛び跳ねた。

2

「よっ、と」

両腕にぐつと力を込めると、鉄の檻がぐにやりと歪んで開いた。多分キンナリーが鍵を持つてゐるんだろうが、男の服を弄もよほるなんて気持ち悪いことはしたくないし、こっちの方が手っ取り早い。

「すごい！」

それに、見目麗しいエルフ達に賞賛されるのも嬉しいしな。エルフつてのは元妖精だけあって、鉄でできたものに弱い。だから強大な魔力を持つてゐるのに、こんな檻で閉じ込められてしまう。

「皆、助けに来たよ！」

嬉しそうな声を上げるニーナに、エルフ達は快哉を叫びながら檻から飛び出した。

「これからどうするんだ？」

「元いた森に帰ろうと思うんだけど……」

ニーナは表情を曇らせた。森に戻っても、また人間に捕まるかもしれないと心配してるのだろう。「どこかもっと安全な場所はないのか？」

「……西の、暗黒の森なら大丈夫かもしれない。まだあそこは人間が足を踏み入れてないから。でも……」

「暗黒の森っていうと、砂漠だの湖だの越えた先にあるところか。確かにあそこなら、エルフもたくさんいるし安全かもな」

「行ったことあるの!？」

「ああ。ま、普通の人間じゃそう簡単に行けるところじゃないから安心しな」

エルフといえば、全員美女と決まってる。暗黒の森にエルフがいるって噂を聞いて行ってみたが、いや噂通りの美女揃いで、実に楽しかったことを覚えてる。

代わりに、行き帰りの砂漠横断はウンザリするほど暑かったけどな。

「私達だけじゃとても辿り着けそうにないの。サーナ、私達をそこに連れてつてくれない……?」
うるうる瞳を潤ませて、ニーナが俺の顔を見上げる。美少女にこんな顔をされて断れる奴は男じゃない。

「ああ、ただどタダ働きつてわけにはいかないな」

俺がそう言うと、ニーナは泣きそうな顔になった。そんな表情も凄くそそる。

計算してやってるなら大したもんだ。

「そうよね……でも、私達、人間のお金なんて持っていないの。価値のありそうなものも……」
「何言ってるんだ」

俺は安心させるように彼女の肩にぽんと手を置いた。

「ここに、とびっきりの宝石がたくさんいるじゃないか」

それからの数週間は、本当に天国だった。

広大な砂漠を横断しながら、夜毎に天幕の下で行われる宴。

前回とは違って水や食料はたっぷり用意したし、結界を張って野獣や盗賊の襲撃はおろか、熱さも寒さも関係ない。それというのも、エルフ達がつぷりと魔力を持っているからだ。

俺は両腕でエルフの腰をそれぞれ抱きしめながら、右側のエルフ娘の舌を吸う。その唾液はまるで最上級のハチミツ水のようにさらさらと甘く、どれだけ食っても飽きるということがない。

「サーナ様、こつちもお」

左を向けば、俺の頭を掻き抱くようにしている娘の胸が俺の顔を挟み込む。例外なくスレンダーなエルフ達の例に漏れず、その膨らみはごくさやかなものだ。しかし、その肌はシルクのようにスベスベと触り心地がよく、どんなに汗をかいてもその香りはミルクのように甘く芳しい。

「はあ、ん……ん、ちゅう……」

「ああ、美味しい……んん、ちゅ、ん……」

下に目をやれば、二人のエルフ娘が俺の脚の間に座り、顔を寄せ合うようにして俺のペニスに舌を這わせている。幸運なことに、売られる直前だった為かエルフ達は全員処女だった。処女じゃなきゃ駄目だなんて狭い見方は持っていないが、初々しい反応が徐々に色気を帯びていく様は何度見てもいい。

最初は拙^{つたな}かったその技も夜毎に洗練され、今では娼婦^{ちやう}もかくやという腕前だ。いやはや、エルフの知性と学習能力には舌を巻く。

ニーナは勿論のこと、助けたエルフの半数以上が俺に抱かれることを最初から喜んだのは嬉しい誤算だった。

身の安全を楯に強引に犯すのも嫌いじゃないが、十人全員となると何人かには逃げられる可能性も出てくるからだ。

中には最初に予想した通り、「助けてくれたのには感謝するが、やっぱり人間は信用できない」とか「身体を売るような真似はごめんだ」などと言いつつ娘もいたが、他のエルフと俺の丁寧な『説得』が実を結び、さっきまで俺の上で自分から腰を振ってよがり、今では股間から白い精液をこぼしながらぐつたりと天幕の中で横たわっている。すっかり俺の虜といった状態だ。最近では、むしろ最初から乗り気だった娘よりも積極的に求めてくる。

「くう……いくぞっ！」

限界が近づき、俺は我慢せず欲望を解き放つ。痺れるような快感と共に腰が震え、白濁の液がエルフ達の顔を汚した。二人の娘は舌を出して精を受け止めると、まるで貴重な蜜だとも言いたげに顔についたそれを指で掬って口に入れた。

「次は直接可愛がつてやる」

俺がそう言うと、二人のエルフは嬉しそうに四つん這いの格好になり、俺に尻を向けた。その股間は触ってもいないというのに、既にとろとろに潤っている。ちなみに、右側の娘は一週間前までは『人間なんて触るのも汚らわしい!』と言っていた。人間、変われば変わるもんだ。あ、人間じゃなくてエルフか。

まあ、美女ならなんでもいい。

「ほら、人間のチンコ入れるぞ」

「ああっ……いや、やめてえっ」

右側の娘にずぶずぶと突き入れる。言葉とは裏腹に、しとどに濡れたそこはあっさり俺の物を飲み込み、離すまいとするようにきゅっと締まった。

「どうだ？ 下賤な人間に犯される気持ち」

「いやあつ！ 入ってる、人間の汚いおちんぼがあたしのおま〇こにずぶずぶ入っちゃってるう！」

三日前までは「サーナ様だけは特別です」という感じだったが、昨日辺りからはまた「下賤な人間」扱いに戻っていた。どうも、「下賤な人間に無理やり犯されている」というシチュエーション

に興奮するらしい。

しかし、本当に無理やり犯した一週間前とは裏腹に、淫語を連発しどろどろに溶けた尻を振って俺の物を飲み込むその姿は、セックスを心から楽しんでるようにしか見えない。まあ、事実その通りなんだろう。

「その汚いチンコに奥まで犯されて善がって尻振ってるのはどの誰だ？ え、この淫乱エルフめ」俺はそれに合わせて口汚く罵ってやる。すると、俺のペニスを咥え込んでいる膣がきゅうっと収縮した。感じているらしい。

「よし、出すぞっ！ 汚い人間の精液を奥で出して、ハーフエルフを孕ませてやるっ！」

「だ、駄目え！ やめて、中に出さないで！ 中だけはっ！ 中だけは許してえっ！」

その言葉自体は、一週間前に彼女が叫んでいたものと同じだ。しかし、必死に俺を突き放そうとしていたのが、俺の腰にぐいぐいと尻を押し付け、奥まで貫くのをねだる動作になっているのだけが異なっていた。

「いくぞ……っ！ 俺の、下賤な人間の子を……っ！ 孕めっっ！」

きゅうきゅうと締め付ける膣の最奥までペニスを突き入れ、精を解き放つ。

「あああああああっ！」

エルフの娘は甲高い声を上げて背筋を反らし、ぶるぶると震えた。

何度か抽送を繰り返し、締め付ける膣で搾り出すように俺が精液を全て吐き出すと、娘は尻を突

き出したまま、ぐったりと地面に上半身を預けた。

「ああああ……人間に子宮の奥まで精液で穢されちゃった……サーナ様の赤ちゃんができちゃう……」

うっとりとはくく彼女の中からペニスを抜き出すと、未だに硬度を保つそれにすぐに別の尻が押し付けられた。

強姦プレイを楽しみすぎて、つい放置しっぱなしになっていた、もう片方のエルフだ。

「私にも中出しなんかしちゃ、絶対駄目ですよ？ 待たせた分たっぷり後から突き入れて、中にごぶごぶ濃い精液を注ぎ込んだりなんかしちゃ、絶対ダメなんですからね？」

そんなことを言いつつ、彼女は俺のペニスを焦らすように先端をスリットでくちゅくちゅと愛撫する。

「サーナさん、私のことも、頭が真っ白になるまで犯し尽くして、たっぷり膈内に人間精液出してハーフエルフを孕ませたりしちゃ駄目ですからね」

右腕に絡み付いていたエルフが、俺の頬に舌を這わせて言い、

「サーナさまあ、あたしの膈も、卵子が全部妊娠しちゃうくらい精子で一杯にして赤ちゃんたくさん作ったりしちゃ駄目ですよお」

左腕に抱きついていたエルフも、そう言って俺の顔に胸を押し付けた。

「え、そーなの？ 私は、私のエルフま〇こサーナの精子で奥まで一杯にして、サーナの赤ちゃん

妊娠させて欲しいけどなあ」

床に転がっていたニーナがむくりと起き上がって言う。この子はどうも、ちょっと空気が読めないところがあるらしい。捕まった時も真つ先に捕まり、一番管理しやすいから使い走りに出されていたとか。

「否も応もない、森に着くまではお前達は全員俺の女だ。中出ししまくって全員孕ませてやるぜ」
そう言って俺がエルフ娘に突き入れると、全員が「いやあん」と甘い声で嫌がり、絡み付いてきた。これが毎晩なんだから、ホントたまんねえな。いつそのこと俺も森に永住しようかとも考えたが、世界にはまだまだ何万人も美女がいて俺を待っている。それを待たせるわけにはいかない。

ま、エルフは長命なせいか元々繁殖力が低く、子供がでにくい。人間との混血ともなると更に確率は低く、一ヶ月毎日やりまくったってそうそう子供ができたりなんかしないだろう。そんなことを考えながら、俺はエルフ娘の最奥で精を解き放った。

「ここまででいいのか？」

鬱蒼^{うつそう}とした森の入り口に差し掛かり、尋ねた俺にニーナはこくと頷いた。

「もう人間に捕まったりすんなよ」

「サーナにだったら、捕まってもいいけどね」

頬を赤くして身をくねらせるニーナ。本当に可愛い奴だな、くそう。

「でも人間は百年も生きられないもんね……悲しい思いしたくないから、今のうちにさよならしておく。私、ずっとサーナのこと忘れない」

ニーナは背伸びして俺の首を引き寄せると、頬にそつとキスした。

ふと俺は気になって、彼女に聞いてみる。

「ニーナは今何歳なんだ？」

彼女はにっこりと笑って答える。

「人間の数え方に直すと六十二歳。まだまだエルフじや子供よ」

うお。上限を突破した。……まあ、可愛いからいいか。

俺は森に帰るエルフ達を見送り、手を振った。

深い森に消えていく彼女達全員の太ももからは、とろりと白い液体が伝っていた。

帰り、一人で渡る大砂漠で危うく死にかけ、やっぱり森に一生いればよかったと思ったのはここだけの話だ。

登場人物紹介

CHARACTERS

サーナ

エルフ美女達と夢の12P。種族的な特徴から全員貧乳だったのを少し残念に思いつつも、ハーレム

プレイを心ゆくまで楽しんだ。

ドーリン

キンナリーの私兵その一。

帰りの遅いエルフ奴隷の様子を見に行つたところ、サーナに裏拳で吹っ飛ばされる。顎^{あご}を骨折し、全治三ヶ月。

ダーイン

キンナリーの私兵その二。

キンナリーの館に入ってきたサーナをつまみ出そうとするも、殴り飛ばされ全治一ヶ月の怪我。

ジービン

キンナリーの私兵その三。

サーナに蹴り飛ばされ全治二ヶ月。

バーギン

キンナリーの私兵その四。

サーナに殴られ全治一ヶ月半。

ブーダン

キンナリーの私兵その五。

ニーナを人質にとるも、脅し文句を全部言い終える前にサーナに殴り飛ばされ半身不随の重症。

ゴーガン

キンナリーの私兵その六。

『ライカニッツの悪夢』と呼ばれ恐れられていた盗賊団の元頭。その強さに目をつけたキンナリーによつて高額で雇われていた。かなりの力自慢で、熊と腕力で勝負しても勝てるほどの膂力を誇っていたが、片手でハンマーを止めたサーナを見て自信を喪失。田舎に帰つて農家を継ぐ。

キンナリー

エルフなどの亜人種を専門に扱う奴隷商。エルフの群れを貴族に売り払い、引き渡す準備をしていたところをサーナに襲撃され、商人としての信用を完全に失う。更に貴族の後ろ楯をなくしたところで、法で禁止されている亜人種の売買が明るみになり、極刑に処される。

ニーナ

森で平和に暮らしていたところを、キンナリーに捕まえられたエルフの少女。サーナに救われ森に帰った後、仲間達と共に人間とのハーフを産む。ハーフェルフは普通のエルフより成長が早い上に皆勇敢に育ち、長くエルフの里を邪悪な人間達から守り、繁栄させた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※ 本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>